

# 石を投げれば博士に当たる

茨城・つくば市

「おーっ、いい眺めだ」。整然としたまちなみ。中央公園近くに屹立する実物大模型のロケット。その向こうには日本百名山の一つ、筑波山。描いたのは、つくばエキスポプレス「つくば」駅前の高層ビルから見下ろした風景です。

近世の城下町や宿場町から発展したまちが多い日本ですが、つくば市の成り立ちはきわめて稀なケース。科学技術立国を目指す国家プロジェクトにより、1960年代に「筑波研究学園都市」建設が始まったのです。

のどかな田園地帯は、1985年に2000万人以上もの来場者を記録した「つくば科学万博」を経て、内外からさまざまな分野の学者や研究者が集う先進的なまちへと変身を遂げました。

聞けば、国や大手企業などの研究機関で働く市民のうち、何と7000人超が博士号を持っているんだとか。ちなみに、市内の公立小中学校の学力も全国トップ水準です。訪れた週末の午後、公園でくつろぐ親子連れが皆心なしか利発そうに見えてきます。そうそう、かつて筑波山はガマの油で有名でした。つまりカエルの子はカエル？ 関係ないか。



JAXA筑波宇宙センター展示館にはH-IIロケットの実物も設置される



# これぞニッポンの原風景

—— 輪島市・白米千枚田

日本海に突き出した石川県の能登半島。輪島の漆器や朝市、人気の旅館加賀屋などで知られますが、北部の海沿いに珍しい棚田があるのをご存じでしょうか。その名は「白米（しろよね）千枚田」。高低差約50m、山裾から海へ滑り落ちそうな斜面に1枚が20m前後の小さな田んぼが文字通り千枚以上も連なります。普通、田んぼといえば平野に広がるイメージですが、実は近世以前は水を利用しやすい山間の谷地や傾斜地が大半だったのです。

水田が青空や月を映し出す春。黄金色に実った稲穂が海風に煽られてそよぐ秋。白米には四季折々、ニッポンの原風景とも呼ぶべき眺めに魅せられて、観光客も多くやってきます。

しかし、今どき機械も入らない棚田でのきつい農作業を一体誰がやっているのかしらん？ あぜ道を歩いていると、その謎を解く碑が見つかりました。昭和末期、後継者不足で荒れ果てた棚田を、愛知のある県立高校が修学旅行先を選び、草刈奉仕を10年間継続。これが呼び水となって景観保全の機運が高まり、多くのボランティアの手で昔ながらの姿を取り戻したんだとか。やっつけてくれますねえ、高校生も。米の収穫だけでなく、雨水を蓄えて土砂崩れを防ぐダムの役目も果たすという棚田。このかけがえのない景色がいつまでも続きますように……。



田植え、草取り、稲刈り。農業機械が使えない棚田の米作りは苦勞が多い

